

受	2	コ	シ	こ
賞	0	ン	ョ	と
作		ク	ー	ば
品	2	ー	ト	ら
集	4	ル	ショ	ん
			ー	ど
			ト	

目次

ごあいさつ	町田市長	石阪丈一
ごあいさつ	審査員長	田丸雅智
6	4	

受賞作品

描く	橋爪 咲耶	8
美食家	齊木 彩音	13
朝の乗客	大埜 楓	17
豊作	山本 実世	22
コーディネート鏡	田上 日奈	27
ふかひれ水	古屋 亮丞	33
人の住んでいた空	宋 雨衡	36
修学月旅行	金澤 凜空	41

あいさつ

町田市長 石坂 丈一

今年で4回目となる「ことばらんどショートショートコンクール」が、これまで最多となる一一四九作品のご応募を得て開催されましたこと、大変喜ばしく思います。どの作品も力作揃いで、子どもたちが、熱心に文芸創作活動に取り組んでいることを、微笑ましく拝見しました。

本コンクールは、一九八七年に、東京町田・中ロータリークラブの皆様と市が、青少年の豊かな人間性を伸ばし、心身の健全な育成を図ることを目的として開催した「ひなた村創作童話コンクール」を前身としています。この精神を引き継ぎ、町田市民文学館ことばらんどが開館15周年を迎える二〇二一年に始まりました。

ショートショートは「アイデアと、それを活かした印象的な結末のある物語」です。親しみやすく原稿用紙1枚から書くことができるため、子どもたちにとって文学と触れあうきっかけとなると思います。

今回の入賞作品は、芸術やおしゃれ、人間性の本質をテーマに描かれた「描く^か」

「コーディネート鏡」「性格整形」などの作品や、「ねえ、『空』って食べたことある？」というセリフで始まる「美食家」など、いずれも独創的な作品でした。町田を舞台とした作品も2作あり、「朝の乗客」では横浜線の車内で起きる不思議な情景が、「人の住んでいた空」では、雲を土に変える薬をめぐる市内企業の奔走が、それぞれ描かれています。

町田ゆかりの作家で町田市名誉市民でもある森村誠一氏は、幼少期を過ごした戦時中に、冒険小説や探偵小説などに夢中になり、戦後も図書館に通っては日本文学だけでなく古典や世界文学まで幅広く読書に親しみました。これらが後に作家としての土台になったのだと思われます。

皆さんにもショートショートを通して、想像の世界で豊かな心を育んでほしいと思います。そして、このコンクールを通じて町田生まれの作家が育っていくことになれば、これほど素晴らしいことはありません。

結びに、作品の審査をはじめ、ご指導・ご協力いただいた審査員の皆さま、コンクールの運営にご協力いただきました東京町田・中ロータリークラブの皆さま、子どもたちの指導にご尽力いただきました学校の先生方やご家庭の皆さまに厚く御礼申し上げます、ご挨拶の言葉いたします。

いあいさつ

審査員長 田丸 雅智

過去最高となる一一四九作ものたくさんのご応募を、本当にありがとうございます。今回は多様な読み方ができる作品が多くあったような印象で、審査の場でも意見が活発に飛び交いとても刺激的な時間でした。受賞者のみなさん、おめでとうございます！

アイデアがひとつのキモとなるショートショートでは、おのずと現実からの飛躍がある不思議な物語になることが多いのですが、この「想像する」「空想する」ということは人間ならではの力ではないかなと思っています。日常の中ではどうしても目の前の現実的なことに追われがちではありますが、これから先もこの「想像する」「空想する」ということを忘れずに、磨きつづけていただきたいなと願っています。ショートショートの創作は楽しいだけではなく、文章力や発想力、論理的思考力など、生きていく上でとても役立つ力の育成にもつながります。このコンクールをきっかけに、引き続きショートショートの創作に親しんでいただければうれしいです。

受
賞
作
品

描く

橋爪 咲耶

とある所にA氏という売れない画家がいた。その画家は何を描いても売れない自分が嫌いだった。どんなに努力しても有名にはなれない。そんな世の中が憎くてA氏は毎日絵を描いた。たとえ手が痛くなっても、寝る間を惜しんでも描き続けた。ある日、A氏は同じ画家であり友人のB氏に相談しに行った。

「なあB、お前はいつもどうやって作品を作っているんだ？」

B氏は答えた。

「そんなの簡単ですよ。ただ自分の好きな物を描けばいいんです。」

よく簡単に言える。そう思い苛立ったA氏はこう言った。

「お前は天才だからそんなことを軽々しく言えるんだろう。なんてったって『天才画家』だもん。どうせ俺みたいな底辺が言う事なんてちっとも分からないんだろう？」

B氏は焦ってこう言った。

「私なりの意見を言っただけです。あと、私は好きな物や見て感動した物を描いているだけです：天才ではありません。それに、Aさんは最近おかしいですよ。毎日絵を描いてばかりじゃないですか。少しは休んでみては…」

「うるさい！！！」

A氏は怒って帰ってしまった。取り残されたB氏はただ心配そうな顔をしていた。家に帰ったA氏は怒りが収まらず、このまま寝てしまおうと思った。しかしベッドに行こうとしたその時、急に頭が天井に向き、衝撃を感じた。起き上がって足元を見てみると、使いたてのバケツとその中に入った絵の具チューブが散らばっていた。バケツには亀裂が入り、絵の具はいくつかキャップがはずれ地面に飛び散っている。新品の物までだ。ようやく事態を理解してからではもう遅い。A氏はこのどうしようもない状況に激怒し、バケツを拾い、絵の具をこれでもかという程入れて近くにあったキャンバスに投げつけた。それだけでは足りずまたもや近くにあった絵の具をぶちまけ、毛がガサガサの筆で引っ掻き、殴るようにキャンバスに怒りとした色とりどりの絵の具を叩きつけていった。

何時間経ったのだろうか。我に返ったA氏はふと目の前のキャンバスに目をやる。

「これは…俺が描いたのか…？」

そこにあっただのは荒々しい筆さばきで語られる「怒り」だった。

「す、すごいぞ！まるでこの作品自体に感情が宿っているようだ…！」

A氏は先ほどの怒りはまるでなかったかのような顔で床に就き、こう言った。

「明日から俺が天才画家だ！」

その後、A氏は早速大きなコンクールにその作品を応募し、そして見事に一番大きな賞を受賞したそうだった。世間ではA氏の作品を賞賛する声が絶えず発せられていた。

「いやー俺はなんて天才なんだろう！」

A氏はSNSで自身の作品が褒め称えられる様を見ていた。今やA氏の作品は世界を飛び回るジェット機の様だ。

（ちよっと怒って殴り描けばこんなに有名になれたんだ。きっと次もこんな風に描けば大儲けするに違いない！）

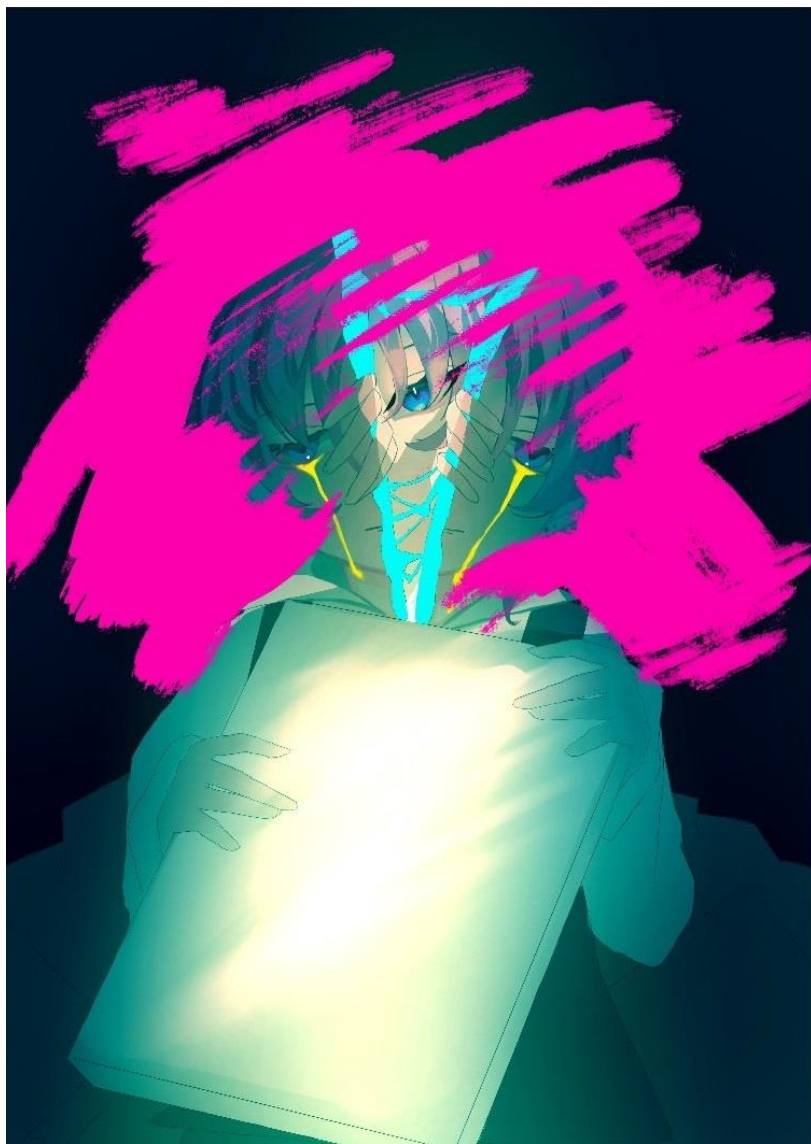
A氏は前のような努力はしなくなり、ただスマホで自分の作品への評価を見るだけになってしまっていた。しかしそんなA氏にも創作意欲までは欠けていなかったようだ。A氏は次は何を描くか考えてみた。しかし、A氏は頭の中にまったくアイ

ディアがうかばない。きっと前のように感情が昂っていないからだろう。SNSでの賞賛の声を見たときのあの気もちを表現すればいい！と思っても一度SNSアプリを開き、賞賛のコメントを舐め回す様に見て回る。もう十分だろう。そう思いスマホからキャンバスに焦点を向ける。

……だめだ。描けない。

いくらあの見聞きするだけで天にも昇る様な心地のコメントをみても、目の前にあるのは汚れひとつない真っ白なキャンバス。ふとスマホの通知が鳴り、画面を覗く。B氏がSNSを更新していた。そういえば、あれからしばらく会っていない。B氏のアカウントに飛んでみると、一枚の絵が投稿されていた。ただの風景画だった。しかし、太陽の作る木漏れ日は見ているだけで暖かく、どこか切ない。素敵、綺麗なんて言葉では表せない絵だった。A氏は頬に違和感を感じた。涙だった。

A氏は筆を取る。今から描く物は荒々しくも、綺麗でもない、言葉なんかで表せない物。目の前のキャンバスに、汚れがついた――。



イラスト：有園 杏

美食家

齊木 彩音

世界は、ほんの小さなきっかけから一瞬にして変わってしまった。自然災害や小さな意見の対立からではなく、空が好きな一人の少女の言葉から、だ。

「ねえ、『空』って食べたことある？」

少女はそう聞くと、少し長い箸をカメラみたいにして空にかざす。空の一部分をつまむようにして、すんなりと箸の先に入ってきた小さな空を、少女は当然のように口にしたら。今思えば何度も食べてきたのだろうが、空を噛み締める彼女の、あの笑顔は忘れられない。

何日も経たぬうちに、噂というものはどんどん広まっていく。もちろん私は、彼女のためにも、空を食べてみて美味しいと感じてしまった自分のためにも、この事実を隠そうと思った。しかし、運悪く通行人がそれを見ていたようで、瞬く間に噂は飛躍していった。

テレビのニュースになる頃には、知らない情報がたくさん出回っていた。けれど、

ほとんどの人が、肝心なところは口にしない。空を食べたことのある人は知っていると思うが、私があの子と確かめ合ったこととして、「空は日中しか食べることができない」「食べた部分は夜空になる」「次の朝には空は回復する」ということはわかっていた。重大な事実には目を背けながらも、やがて空の味は世界中に広まっていった。

さあ、世界中の人々が空の美味しさを知ったことでどうなったか。まず、空の争奪戦が始まった。まるで人気アイドルのチケットがすぐに売れてしまうように、朝早くに昼空は食べられてしまう。つまり一日のほとんどが夜空なわけだが、奇妙なことに太陽光は届いているようで、生活のサイクルは崩れなかった。そうは言ってもほとんどの人が、明るい空がすぐに消えてしまうことに悲しみを抱いていた。けれども、空の味の虜になってしまった人も多くいて、この現状を回復するには時間がかかりそうだ。

と、私も今この瞬間までは思っていた。でも、やはり世界は狭く、もろい。一人の少女の言葉ひとつに左右され、大きな竜巻のようにどんどん巻き込んで変わっていく。それこそ、起点の意図せぬままに。

「ねえ、『夜空』って飲んだことある？」

私の隣に座る少女は、スプーンで夜空をすくって私に見せた。私の目には、久しぶりに見る明るい空と彼女の笑顔が映っていた。



イラスト：清 美晴

朝の乗客

大埜
楓

「成瀬く成瀬く」

ドアが開くといつものメンバーが現れた。

あ、あの人ここに来るかな。

やっぱり来た。この人のかばんいつもぶつかるんだよね。

いつも通り私となり立ったのは、ハデな服に大きなかばんを持った女の人。

お、あの人は今日も席ゲット！

空いている席を一番にとるのはネクタイのまがったサラリーマン風のおじさん。

今日も朝からつかれているように見える。

吊り革に手をのばして遊んでいるのは、プールバッグを持った小学生くらいの姉

弟。

今日も仲良いな。

横浜線で毎朝見かける人たちだ。

私は小学六年、受験生だ。夏休みに入ってから毎日、この電車で塾に通っている。

いつもと同じ朝だったのに、今日は何かが違う。

途中からベビーカーに乗った二才くらいの男の子とお母さんが乗って来た。その男の子はぎんぎん泣いていた。

ドアが閉まると泣き声はもっと大きく聞こえた。お母さんはもうしわけなさそうな顔をして、一生懸命なだめている。

大きいかばんの女の人は、じろりと男の子の方を見る。

気がつくとブルーバッグの姉弟はいなかった。

ネクタイのまがったおじさんは、何やらかばんの中をこそごとあさっている。男の子はまだ泣いている。

おじさんはかばんの中から何かを出した。

!!

トウモロコシ!!

そのトウモロコシには、皮もひげもついていた。まさにとれたてといった感じ。

おじさんは無表情でトウモロコシの皮をむいた。

そして男の子の方へ投げた。

え？うそ!!

男の子は目を大きく開いて泣きやんだ。

トウモロコシは皮を羽にして飛んでいた。

まわりの人は目をパチパチとさせている。

おじさんだけがニコニコと男の子の方を見ている。

トウモロコシはくるくるまわると、ポンポンポンとはじけた。

たちまち男の子の手の中はポップコーンでいっぱいになった。

男の子は不思議そうに手の中のポップコーンとおじさんの顔を交互に見てから、
パクツとポップコーンを口に入れた。

男の子はポップコーンを笑顔で食べている。

おどろいて目を見開いて立っていたお母さんもほっとした顔になった。

次の駅に着くとおじさんはゆつくりと席を立て降りていった。

あれ？おじさんここで降りちゃうんだ。

そこはおじさんがいつも降りる駅よりだいぶ手前だった。

次の日、私はまたいつもの電車に乗った。

「成瀬く成瀬く」

ドアが開くとおじさんの顔が目に見え込んできた。

今日もネクタイがまがっている。そして一番に空いている席に座った。大きいかばんの女の人は相変わらず私にぶつかってくる。

プールバッグの姉弟は今日もあきずに吊り革で遊んでいる。

昨日の出来事なんて何もなかったかのように……。

今日もいつも通り電車は走る。

おじさんはいったい何者なんだろう。

私は考えながら窓の外をながめる。



イラスト：高平 結栞

豊作

山本 実世

ほら早く、遅れちゃうよ！

え？ 一体なんのために丘に向かっているのかって？ そうかキミはこの村に来たばかりだったね。

この村にはある言い伝えがあるのを知っているかい？

うちの村は稲作が盛んなんだ。だから、田植えと収穫の時期はみんな大忙しさ！
うちの村のお米は少し特殊なんだ。

乾燥して出来上がった稲が白く光っているように見えたことはないかい？ まるでお星さまみたいだろう！

はじめは何が起こっているんだろうとびっくりするよね。まあ、そこが神秘的でいいんだけど！

この秘密はお米をつくる工程にあるんだ。

お米を収穫したあとに太陽の下で乾燥させるだろう？

でも、このお米は太陽の下で乾燥させるよりも、夕方から夜にかけて星空の下で乾燥させたほうがぐっと美味しく出来上がるんだ。

夕方に村のみんなで稲を運んで、地面いっぱいには並べる作業は大変だけど、すごくやりがいがあるって楽しいよ！

キミも来年出来るといいね。

なぜ星空の下で乾燥させるのだと思う？

最近知ったことなんだけど、これは星神様の加護があるからなんだって！

ほら西の方に大きな神社が見えるだろう？よく空が見えるから、花火大会のときによく集まって見ていたなあ。

あそこには星神様という星を司る神様が祀られているんだ。

この神様は遠い昔、星空からこの村へ降り立ち一緒に稲作をして暮らしていた。

そのことから星空の神、つまり星神様と呼ばれるようになったんだ。

神様と一緒に稲作が出来ると楽しそうだと思わないかい？いいなあ！羨ましい！

今の星神様は宙の上から村のみんなを見守ってくれているから、会うことができないんだ。

でも何事にも例外があるだろう？星神様にだって例外がある。

いつもは宙の上にいる星神様も一年に一度だけみんなに会いに来てくれる日があるんだ。

星神様は使いが彗星となり、それを地に送ることで、会いに来てくれるんだ。

今日はその、星神様が会いに来てくれる日なんだ！

ほら、もう目の前は丘だよ。みんなもう集まってるね。

年に一度の大イベント、キミも参加できてよかったね！

見て！あの星空にいるのが彗星、星神様の使いだよ！

みんなここで今年の豊作のお礼と、来年の豊作をお祈りするんだ。キミも一緒にお祈りするといい。

今、不思議なものを見ている。夢なのかと目を疑うほどの光景だ。

数ヶ月前にこの村にやってきた。何やら今日は星神様という神様の使いがやってくる日らしい。

隣でまくしたてるようにこの村のお米と星神様の関係について話す彼女を横目に空を見上げた。

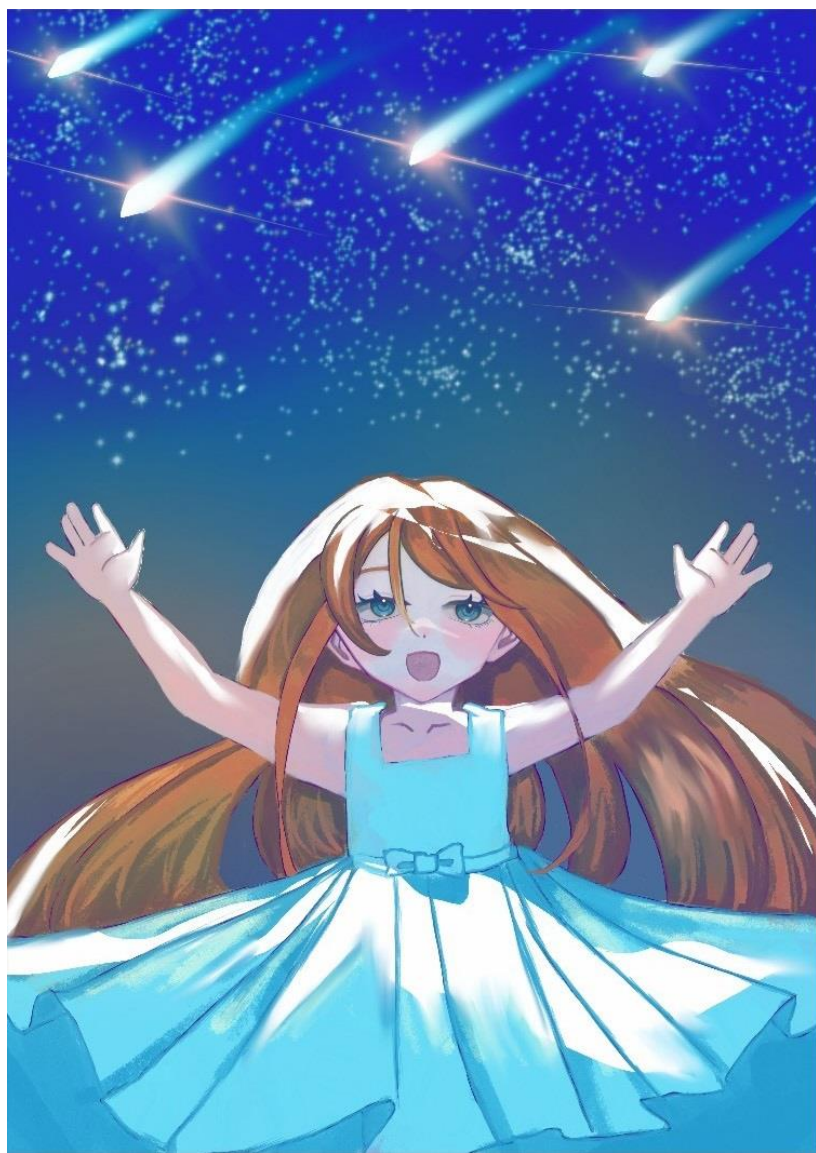
するとなんということだろう。これまで趣味でプラネタリウムなどへ星を見に行つたため、彗星も一度や二度は見たことがあった。

しかし、こんな彗星は初めて見た。まさか、彗星が、お米になっているなんて……！
彼女が言うにはこの彗星はお米の形をしていることから「米ツト（コメツト）」と呼ばれているらしい。

驚きのあまり空を見上げたまま硬直していると、彼女は更にこう言った。

「星神様の使いが来た翌朝には、星神様のプレゼントが村中のポストに入っているんだ。明日の朝、確認してみてね！きつとびっくりするよ。」

翌朝ポストにはお米が一粒ちよんと入っていた。



コーデイナー鏡

田上 日奈

「あーめんどくさい。」

私は、自分で服のコーデをきめるのがきらいだ。なぜなら自分に合う色とか分からないし、とにかくめんどくさいからだ。今日もそんなことを考えていると、家のインターホンが鳴りひびいた。今は家にはだれもない。何がといたのか気になったので、玄関に出てみた。すると、そこにはだれもいなくて、ダンボールにつつまれた大きな箱だけが置いてあった。どこから送られて来たのかも、だれがとどけてきたのかも分からなかった。

「何これ。」

少しあやしくも思ったが私はなぜかその箱にとっても興味を惹かれた。

おそろおそろあやしい箱を開けてみた。

すると、家の家具として使える少し大きめの鏡と、「コーデイナー鏡」と書いてある紙がはいっていた。

どうやらこの鏡は、服を着ていく場所と、その時の気分を言えばそれにびったり

なコーデを決めてくれるらしい。

「すごい！ めっちゃ便利じゃん！」

私にはぴったりのアイテムだ。

しかも、明後日には他校との連合音楽会があるから、その時の服装も考えてもらうことができる。

「今日はリハーサルもあるし、さっそくコーデを考えてもらおう！」

「場所は、市民ホールで、気分はきっちり。」

すると、鏡は光をはなった。

「うわ！すごい！」

光がきえた後、私は鏡の中の自分の姿にとってもおどろいた。

「プロの音楽家みたいなすてきなコーデ！」

「この鏡の力は本当だったんだ！」

私はともうれしかった。日々の苦勞からやっと解放されたからだ。

「これでリハーサルと本番の音楽会は、ばっちりだ！」

私は安心して学校に向かった。

学校につくと、みんな音楽会の話で持ち切りだった。

教室に入るとすぐに私の友達のさやが

「おはよー」

と話しかけてくれた。私も、

「おはよー」

と返事を返した。

「連合音楽会きんちようするねー。」

やはり、今日はリハーサルで、本番にも近づいてきているので、さやもきんちようしているのだろう。

すると、さやが私のことをじっと見てくる。

「私、なにか変？」

「いや、そうじゃなくて今日すごい服のセンスがいいなーと思って。」

「服のセンスって私の？」

「そうそう」

私はすぐにコーディネート鏡のことを思い出した。本当に夢でなく、鏡もすばらしいものなんだと改めて思った。

「すごいオシャレに見えるよ。」

「ありがとう。本番もこの服を着るんだ。」

「あのさ、私もおそろいの服で出たいんだけどいい？」

「いいよ。」

二人でおそろいにして音楽会に出るのがとても楽しみだった。

その後も、たくさんの人に、

「その服、どこで買ったの？」

などと聞かれた。こんなにほめられたのは、はじめてで、とてもうれしかった。家でも親にほめてもらうほどオシャレなコーデだった。

「本番も、がんばろう。」

そうして、ついには本番当日となり、コーディネート鏡に決めてもらったおしゃれなコーデで、学校に向かった。

「おはよー」

さやと、登校中に会った。二人ともおそろいのオシャレコーデだ。

「やっぱり二人おそろいでいいね。オシャレ。」

さやはうれしそう。

「連合音楽会もこれでがんばれそう！」

二人で楽しく話していると学校についた。

学校に入っろう下をわたっているけど人がだれも通っていない。

「みんなはりきってはやくきてるのか。」

なんて言いながら教室に着いた。

ドアをあけるとその光景におどろいた。

『私たちがたくさんいる!!』

でもよく見てみると顔はちがった。

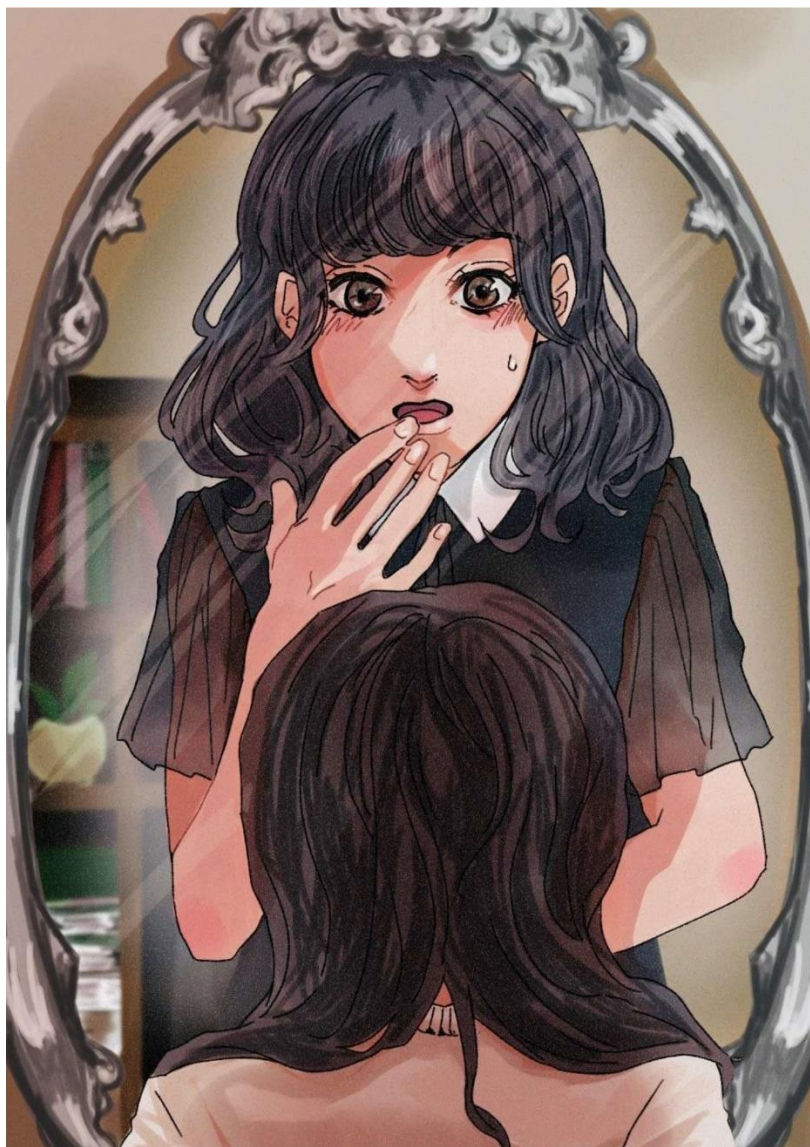
『もしかしてみんな同じ!!』

私はとてもおどろいた。コーディネート鏡がすごすぎてまさかこんなことになるなんて思ってもなかったからだ。

「信じられないけど、仕方ないよね。」

私はまだおどろきつつも状況を受けとめた。

けっきょく私たちは全員おそろいの服で音楽会に出ることになった。



イラスト：江口 藍夏

ふかひれ水

古屋 亮丞

世界中でフカヒレブームがまき起こっていた。世界中の海で材料となるアオザメ、ヨシキリザメ、メジロザメが乱かくされていた。

サメを愛してやまない鮫島一郎は、何とかサメを救いたいと思った。そこで「フカヒレ水」という、植物せんいで作られた飲み物で見かけは水のようなだが、味はフカヒレスープのよう、塩をまぜるとフカヒレそのものようになる、夢のような食品の製作を思い立った。しかし、一郎は何度も試行さくごを続けたが、とうとう作ることはできなかった。

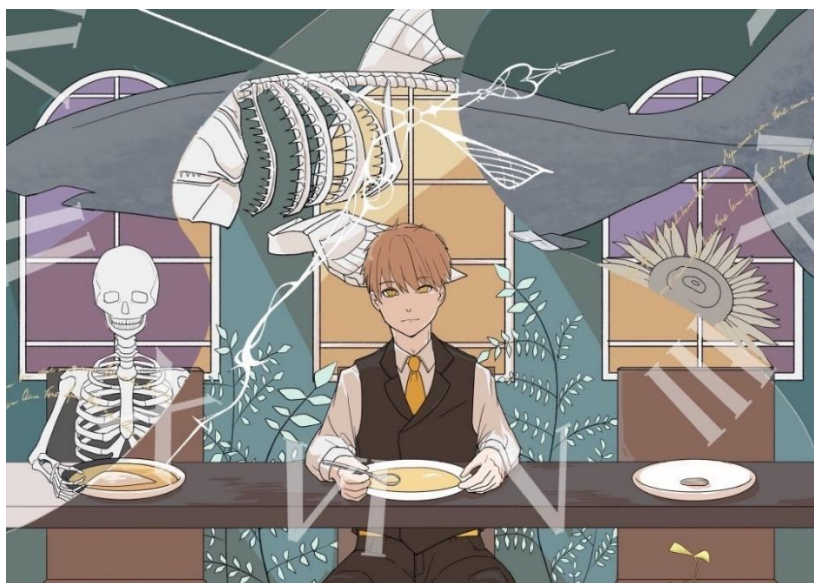
一郎の夢は息子の次郎に受けつがれた。次郎はついにフカヒレ水の開発に成功したが、まずくてだれも飲んでくれなかった。

夢は孫の三郎に受けつがれた。三郎はとうとうおいしいフカヒレ水を開発した。しかし商売が下手だったので、フカヒレ水はぜんぜん売れなかった。

夢はひ孫の四郎に受けつがれた。四郎は、商売の才能があり「フカヒレ水」は飛ぶように売れ第二次フカヒレブームがまき起こった。一郎がフカヒレ水の製作を思

い立ってから、百年がたっていた。

しかし、すでにアオザメやヨシキリザメなどは五十年前に絶滅し、本物のフカヒレは、食べられなくなっていたのだった。



イラスト：秋山 莉穂

人の住んでいた空

宋 雨衡

それははるか未来の事。人口が増え続けてしまう。そんな人口増加が急激に起きたために、人々に物資が行きとどかず生産の手も足りていない。どれ程人口が増えたんだと思えば、人口四〇万ちょいの町田市の人口が百万人ごえになってしまった程なのだ。

この大問題に世界は、埋立地をたくさん作ったり、森林を開いて多くの土地を開拓したりしていたそう。それでも残念なことに、問題解決には至らなかった。

ついに途方に暮れた世界だったが、町田市はあきらめなかった。そして町田市は、思い切って大きな決断をする。

「空に人の住む町を作ろう。」

このたった一つの発言が世界をも動かしてしまう、人の住める空を作るという計画へと発展するのだ。

さて、少し前に戻ってみましょう。町田市長の発表の後、これは世界にも広がる。この計画は希望の光とも見えたが、空に町を作るなんて不可能だと言われるはめに。

しかし、不断の努力を重ねてついに雲を土に変える薬が完成する。

この薬は、雲にまくだけで人の住める土にみるみるうちに変わるのだ。またこの土はどんなものも育てられる。どんな動物、川や海に住む動物さえも住める。どんな重さ・大きさの建物も建てられる!!

この薬がつくられた経緯やつくり方は企業秘密らしい。

この大発明に世界は大絶賛。町田市長は、会社を立ち上げ、町田を本社にして世界中に広げました。おどろいたことに、本社は町田市の空の薬をまいた雲の上に建てられているようだ。

その後、万能と思われた雲は実はリスにふれるともとに戻ることが研究により分かった。このデメリットを世界は気にしない。なぜなら雲にリスが登ってこられるわけもない。だからこの事を公表しなかった。

さて、今ははるか未来の三〇二四年。ぼくの名前はソラ。ここは町田のどこかの一軒家。今から空に引っ越しするんだ。空の学校にかようことができるなんてすごく楽しみだ。だけど、リスをつれていてはいけないうんだって。ルールだししかたないか。でも、やっぱり自分のペットであるリスのリン助をつれていきたいな。かくれて持っていったらおう。

ところで、リン助っていい名前でしょ。ぼくがつけたんだ。我ながらいいと思う名前だよ。

さあ、いよいよ引っこしだ。空ってどんな感じかなあ。本当に楽しみな。

雲までは長いエレベーターで行くんだって。ちよつとこわいけどどきどきする。あつ、雲の上にもう着いた。家はどこかな。どこも新しい世界でとても楽しい。

少し歩くと家が見えた。近所さんへのあいさつをしよう。

「こんにちは。」

「こんにちは。君、名前は？」

名前を聞かれたから自己紹介しよう。

「小学六年のソラです。実は市長の子です。」

と、はずかしそうに言った。

「へえ。市長さんの子どもかあ。えらいねえ。自分で自己紹介できて。」

と言いつつ終わらぬうちに地震か。ぼくはすぐに家へにげた。地震が弱まった。

「地震、やんだよ。」

と父さんに言われた。

よかったと安心したのもつかの間、リン助がいなくなっておどろいた。

「父さん、リン助がいない。」

「なんだと。リスをつれてきたのか。」

父さんは怒るどころかあわてていた。

すると、自分の家がみるみる落ちていく。ぼくはただこわかった。

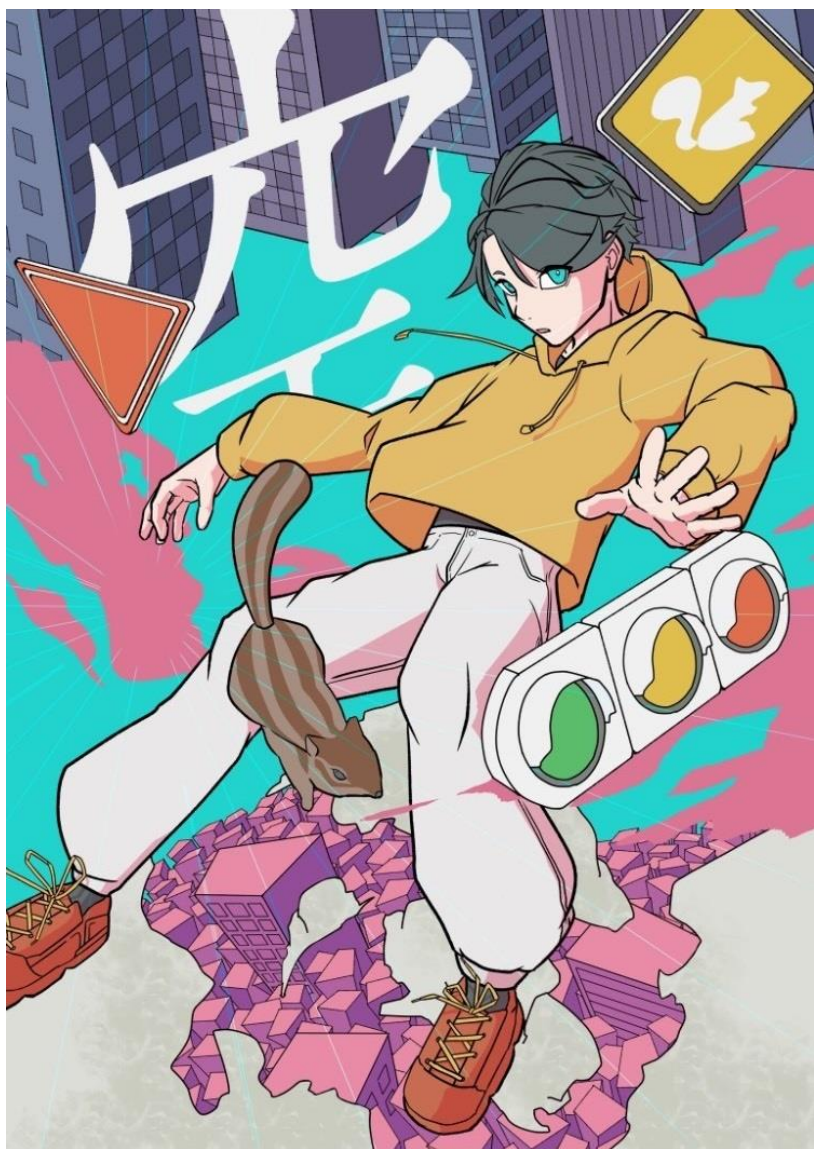
後に気づいたことだが、実は雲の上のものが全て落ちてきたそうだ。原因はリン助だという。さいわい、ぼくたちは助かったが、これは多くのけが人を出した大きな事故となった。さらに、雲の上にあった本社も落ちてしまった。これは全世界をパニックにさせる出来事となった。

その内、空の町は危機ということになり、かつて大都市であった町田はおとろえ、市長も総辞職となった。

さて、人口増加はどうしよう。なんと、横浜市が地下に人の住める町をつくる発表をした。薬もできた。そう、今は地下に人が住んでいるのだ。

ただ、カワセミがふれるとこれはもとの土に戻り、息さえもできない。

前と同じ悲劇を起こさなければ、よいのだが…。



イラスト：秋山 莉穂

修学月旅行

金澤 凜空

帰りの会で先生が言った。

「修学旅行は月に行きます。」

え……？ 僕の頭には「？」しか浮かんでこなかった。

「どうだ、今っぽくていいだろう。」

先生はそう言ったが、冗談としか思えなかった。僕たちの学年は三十人しかない。それでも全員で月へ行くなんて。他のみんなも冗談としか思っていないようだった。

それから一週間が経ち、いよいよ修学旅行当日になった。

「はい、それではみなさん、トイレを済ませたら、順番にロケットに乗りましょう。」

先生が指差した方向を見ると、本当にロケットがあった。観光バスくらいの大きさだった。おそろおそろの中に入ると、ぎゅうぎゅうに座席が並んでいて、頑丈そうなシートベルトが付いていた。座席の後ろのスペースには宇宙服がずらりと壁にかかっていた。本当だったんだ……。シートベルトをしめながら、僕は不安やわくわく、

いろんな気持ち湧き出てきた。

「それでは発射しまゝす。」

先生ののんきな声と共に、大きな地響きを立ててロケットが発射した。その後のことは衝撃がすごすぎて残念ながら覚えていない。どのくらい時間が経ったのだろう。先生の声でふっと目が覚めた。

「そろそろ月に到着しまゝす。シートベルトはそのままお待ちください。」

窓の外を見ると、映画で見たことのあるような景色が広がっていて、ロケットの中が歓声に包まれた。すごいぞ！

着陸の衝撃もすごかったけど、今度は気絶せずに済んだ。先生の指示を聞きながら、みんな宇宙服を着込んだ。本当の宇宙飛行士になった気分だ。みんなスマホで写真を撮り合ったりしてはしゃいでいる。

そしていよいよロケットの外に踏み出した。なんだか体がふわふわする。少し跳んだだけで体が高く浮き上がって、まるでゲームの世界に入り込んだみたい。

「みんな楽しんでるね。それでは、この観察シートに気付いたことを書き込んでいってね。写真を撮ってもいいですよ。」

いつも使っているおなじみの観察シートだけど、場所が違うだけでとても新鮮に

感じる。僕もみんなも真剣に観察を続けた。月の表面は灰色で地球みたいな色がない。草木も生えていないから石ころだらけの砂漠みたいだ。色のせいかな、とてもひっそりとした感じがする。そんなことをまとめているうちに地球に帰る時間になつてしまった。

なごりおしさもあるけれど、地球に帰れるという安心感でいっぱいになり、みんなで楽しくおしゃべりしながらロケットに乗り込んだ。宇宙服を脱いで座席に座り、シートベルトをしつかりしめて発射を待った。あれ？ なかなか発射しないな。みんながざわざわし始めた時、先生が申し訳なさそうにこちらを見て言った。

「みんなごめん：先生、月に着いて嬉しくなっちゃって、ロケットのエンジン切り忘れてたみたいで：ガス欠です：ロケットが動かないんです…。」

「ええー！」

ロケットの中に大絶叫が響き渡った。大ブーイングだ。泣いている子もいる。僕だって泣きたい。

「みんなはどうやったら帰れるか考えましょう。」

半泣きの先生が深々と頭を下げたところでパチツと目が覚めた。急いで周りを見渡す。僕のふとん、僕の部屋。夢で良かった…。安心して大きなため息をついた僕

を子猫のミイが心配そうに見上げている。僕はミイをだっこしてなでた。やっぱり地球が一番だ。いつもの朝食を食べて登校する。いつもどおりの学校で授業を受けた。

帰りの会で先生が言った。

「修学旅行は月に行きます。」



イラスト：高平 結栞

幸運を持ち歩くバツタ

下嶽 皇惺

ある日、ニュースで黄色のバツタが確認されたそう。「ふーん」と心でつぶやきながら学校に行く途中で中ではいわかんを感じて、ふとうしろをふり向くと、黄色のバツタがついてきていた。あまりにめずらしかったことなので、そのバツタをつれて家へ走った。昔お父さんがつかっていた虫かごをそうじし、そのバツタを飼育することにした。そしてエサをあたえ、大切に育てて初めてだつぴをした。うれしく思っていると、だつぴのからにきらきらしたものがあり、何だろうとよくみると、何と、金粉だったのだ！これを見ておどろいた自分は、「えっ」と思わず声に出してしまった。このことを友達にいうとあつというまに世間に噂が広まってしまった。このせいで、バツタがねらわれてしまった。なんとかかくし通さないと思いがら、いつもバツタをそばに、持ち歩くことにした。何とか学校からも協力してもらうことに成功した。そして、かくしながら大切に育て、二回目のだつぴが始まった。自分は心の中で「がんばれ！」と応援するように見届けた。そしてだつぴが終わり、今度は、イエローサファイヤと呼ばれる宝石を僕に受け取ってほしそうに差し伸べ

てきた。そしてだんだん色がかがやいてきた。そこでインターホンがなって、出てみると、とびらの前に取材者がたつていた。そして、「このようなものです。どうぞよろしくお願いします。」と名刺を差し伸べてきた。その名刺を受け取ると、「黄色のバッタがいるときいてやってきました。失礼ですが家に上がってもよろしいでしょうか？」と聞いてきた。ぼくはバッタがねらわれていると思い、「人ちがいじゃないですか？」とごまかした。そして、取材者が「そうでしたか。大変失礼いたしました。」ともうしわけなさそうに帰っていった。ほっと安心すると、バッタがだっぴをしようとしていた。

しかし、なぜかバッタがだっぴをしようとしてない。なぜだろうとよくみると虫かごにカマキリが張りついていていた。ぼくはカマキリを追いはらおうとしたらかまれてしまった。ぼくはいたいのをガマンして外においだすことに成功した。そしてバッタがだっぴを始めるとぼくは安心した。そして、だっぴに成功した。やっぱり前より体の表面がかがやいてきている。そして、ここである変化に気づいた。バッタが日本語に近い鳴き声でないでいた。

そして、しばらくして、とうとう最後のだっぴが始まった。そしてだっぴがおわって、羽化がはじまった。そして、羽化が終わった。そして、ぼくに語りかけてきた。

「ねがいをつかなえてやろう」と言った。ぼくはこの世界の平和をねがった。そしてバツタはまぶしくかがやき、小さなちようになつてきえた。そして、黄金のバツタはまたこの世界のどこかで、新しい飼い主をまつている。



イラスト：中村 花梨

性格整形

藤原　くらら

「性格整形、今ならお手頃価格です！」そんな言葉がビルのモニター広告からきこえる。二重整形や鼻整形などの「見た目」だけにとどまらず「内面」も整えることが主流になった二五〇〇年の日本。中高生で施術を受けるのが一般的で、どれだけ良い性格を手に入れるかによって、カースト上位かが決まる世界だ。高校二年生の私はまだ施術を受けていない。家族にも数少ない友人にも早く受けるべきだと言われるが受ける気はない。誕生日や血液型といっしょに性格レベルを教える風潮の中、私は誰にも教えていない。S、A、B、C、D、Zがある。バイトの面接でも、「君、受けてないからZだね？うちはC以上じゃないとねー」。ああ、うっとうしい世の中だ。何が性格整形だ。どこも整ってねーだろ。心の中でつぶやいている。人間は結局レベル分けして、人を下に見たがる。私はそれが大嫌いだ。学校も社会も全部自分を安定させる方法が自分より下を見ることしかないみたいで。そんな事しなくなくて友人に「私さ、性格レベルAなんだよねー笑」と言われてもずっと黙っていた。それが原因で陰口を言われていたのも気づいていた。ある日それがエスカ

レートしてクラス全員から攻撃されるようになった。「お前どうせ無整形のZだろ？」
と言われた。いつものことだから流そうとしたら涙がこぼれてきて言いかえすために
そいつらの前まで行ってしまった。「お？なんだZさーん殴ってほしいの？WWW」
「キモ」「こっち来んなよWW」色んな言葉でざわざわしていた。その中で「Sだよ」
と言った途端、そのざわざわが消えて、見たことのない顔で全員が頭を下げてきた。
勝った。と思ってしまった。やられていたときより悔しかった。結局私も同類のよ
うに見下してしまった。



パンのパン屋さん

関口 朋也

これは、あるパン屋さんのお話です。コロコロ、モチモチ、ここではいろんな味のパンがパン達の手でくふうされて作られています。とろとろでのう厚なクリームの入ったクリームパン、ふんわりと焼けて食べたら口がとろけてしまいそうなメロパン、どれもみんなすてきで美味しそうなパンです。

「俺が一番だ。」「ちがう、おらが一番だ。」

おや？パン達が何かを争っています。そう、このパン屋さんでは、毎月パンのパトル大会が開かれるのです。色々なパンの代表者が出てパトルをします。代表者はなぐり合うのではなく、自分のパンの一部をちぎってしんさ員のフランスパンに食べてもらうのです。パトルが終わった後に結果発表をフランスパンがします。ドキドキ、パン達はきんちよう感に包まれて、パン屋さんは誰もいないかのように静かになりました。その結果、今月はやさしい味のクリームパンに決まりました。

このようにしておすすめが決まり、その毎月のおすすめが有名になり街中にいや、世界に知られるすてきでちょっと不しぎなパン屋とひょうばんになり、今でも東京、

日本、世界をたびしてパン屋をやっています。もしも、このパン屋さんを見つけたら、今おすすめ、クリームパンを半がくして待ってます。



イラスト：江口 藍夏

ある国は、少子化に悩まされていた。物価の高騰やライフスタイルの変化など、様々な原因が重なり事態はどんどん悪化していった。そこで国は、ある政策を行うことにした。それは3Dプリンターで人間をつくるという政策だった。さらには、3Dプリンターで人間をつくると、国から謝礼金がもらえるところだった。一部、反対する人もいたがほとんどの人は少子化の解消を期待し、賛成した。

政策は政府の狙い通り人々に浸透し、すぐに3Dプリンターで多くの人間がつくられていった。始めは不安だった人達も、3Dプリンターでつくられた人間と本物の人間は、見た目もふるまいもそっくりだったので不安はすぐに消えていった。

3Dプリンターでつくられた人間は本物の人間と同じように赤ちゃんから子供、大人へと成長し、学校へ行ったり仕事をしたりした。本物の人間と全く見分けがつかなかった。「本物の人間」「3Dプリンターでつくられた人間」という差は全くなかった。

3Dプリンターで人間をつくったことで少子化は解決し、今まで子供に恵まれな

かった人も子供をもつことができて大いに喜んだ。人口が増えたことにより経済も暮らしも安定した。

政策は人口増加だけでなく、他にも良い影響を及ぼした。交通事故や病気による死者が大きく減り、平均寿命が大幅にのびた。理由は明らかにっていないが、3Dプリンターでつくられた人間は、本物の人間よりはるかに丈夫で病気になることもなく、健康そのものだった。それがさらに人気を呼び、初めから3Dプリンターで子供をつくることを希望する夫婦もめずらしくなかった。メリットだらけのこの政策は海外でも真似する国が始めた。

一番初めに3Dプリンターでつくられた人間が百才になる頃、この国は異様な空気で包まれていた。例えば宅配業者の顔はシワだらけで髪もグレーがかった白髪の、見た目はまぎれもなく老人なのに重い荷物を軽々と持ちあげ運んでいた。他にはプロ野球選手に老人のような見た目の選手がいたり、その国に住んでいる人々の半数以上が老人のような見た目なのにまるで若者のように軽快で活力を感じる動きをしていた。

この国では、平均寿命という言葉がなくなり、「人は死ぬ」という概念も消えていた。



イラスト：高平 結栞

受
賞
作
品
一
覽

市長賞

小学生の部

「描く」

橋爪 咲耶

（町田市立相原小学校 六年）

中学生・高校生の部

「美食家」

齊木 彩音

（町田市立鶴川第二中学校 三年）

教育長賞

小学生の部

「朝の乗客」

大埜 楓

（町田市立忠生小学校 六年）

中学生・高校生の部

「豊作」

山本 実世

（町田市立町田第二中学校 一年）

東京町田・中ロータリークラブ会長賞

小学生の部

「コーディネート鏡」

田上 日奈 （町田市立町田第一小学校 六年）

中学生・高校生の部

「ふかひれ水」

古屋 亮丞 （町田市立金井中学校 一年）

審査員賞

小学生の部

「人の住んでいた空」

宋 雨衡 （町田市立南第三小学校 六年）

中学生・高校生の部

「修学月旅行」

金澤 凜空 （町田市立金井中学校 一年）

ことばらんど賞

小学生の部

「幸運を持ち歩くバッタ」

下嶽 皇惺 (町田市立南第三小学校 六年)

中学生・高校生の部

「性格整形」

藤原 くらら (和光高等学校 二年)

森村誠一賞

小学生の部

「パンのパン屋さん」

関口 朋也 (町田市立町田第一小学校 五年)

中学生・高校生の部

「超高齢化社会」

岩本 透青 (町田市立鶴川第二中学校 一年)

審
查
員
講
評

「描く」（橋爪咲耶）

創作の本質に迫る傑作でした。A氏が怒りに任せて絵を描く場面や、B氏の描いた風景画の描写など、見事な筆致で情景がありありと浮かんできました。SNSのくだりも含め、創作者なら誰もが陥りそうになることへの風刺的な側面をはらみながらも、そちらに転落していかない展開に胸が熱くなります。ラスト一文の「汚れ」という表現も素晴らしかったです。

—— 田丸 雅智

「美食家」（齊木彩音）

「空を食べる」から始まり「夜空を飲む」で終わる対比が素晴らしかったです。またファンタジックな世界観にリアリティを与える細やかな設定や工夫が随所にあり、物語のなかへ自然に引き込まれました。何より、この物語が描く世界観の美しさや、心地よい文章のリズムが素晴らしく、ずっとその世界に浸っていたくなるような作品でした。

—— KENTHE 390

「朝の乗客」(大埜楓)

日常を舞台にした作品は細部の描写が具体的であるほど読み応えが増えますが、この作品には光る情景表現がみごとにちりばめられていました。そしてそんなリアリティを大胆に打ち破る展開に意表をつかれ引き込まれます。最後にまた日常に戻るところも、現実と地続きに思えて嬉しくなりました。

—— 藤岡 みなみ

「豊作」(山本実世)

白く光って見えるお米と星を結び付け、星空の下で乾燥させた特殊なお米というアイデアへ昇華された点がお見事でした。乾燥させている光景も浮かんでき、ロマンを感じます。途中で語り手の視点が変わる構成も素晴らしいです。「米ツト」という言葉遊びもじつに愉快で、ラスト一文もなんて夢があつて素敵なんだろうと、長く余韻に浸りました。

—— 田丸 雅智

「コーディネート鏡」(田上日奈)

ユニークな結末に驚かされ、楽しませていただきました。「おしゃれをする」という行為が何を意味するのか――個性を発揮するためのものなのか、それとも皆が「良い」と思うゴールに近づくためのものなのか。読み終えた後もさまざまな考えが心を巡り、余韻の残る素晴らしい物語だと感じました。

―― K E N T H E 3 9 0

「ふかひれ水」(古屋亮丞)

フカヒレというテーマ選びとアイデアがまず個性的です。研究がどんどん次の世代に受け継がれるという展開は壮大なのにテンポがよく、続きが気になってどんどん読みたくなります。原稿用紙1枚半という短い作品ですが、大きいスケールでメッセージ性も味わいもあり、無駄のない美しさを感じました。

―― 藤岡 みなみ

「人の住んでいた空」(宋雨衡)

空の上に街を作るという大胆な発想から始まる物語が印象的でした。細かなディテールが丁寧に描かれており、楽しく読むことができました。また、リスやカワセミ、横浜市をライバルに据えた設定など、町田を知る人が思わず笑みを浮かべるような工夫があり、オリジナリティを感じさせる作品でした。

—— KENTHE 390

「修学月旅行」(金澤凜空)

描写が素晴らしく、本当にいま自分も月に行っているかのように錯覚しました。ぼく自身、宇宙へ修学旅行や遠足に行く作品を書いてきましたが、月で観察シートを書く場面など、自分には絶対に書けないと唸りました。ラストのループ構造もいいですね。月への旅行が現実味を帯びてきた昨今、いつか本当にこんなことが実現したらと夢が膨らみました。

—— 田丸 雅智

「幸運を持ち歩くバツタ」（下嶽皇惺）

宝物のような黄色いバツタと出会い、その後さまざまなピンチを切り抜ける展開が楽しかったです。直接的には書かれていないバツタとの絆も、登場人物たちのふるまいから豊かに想像することができます。バツタが「小さなちょう」になるというラストも天才的な発想だと思いました。

—— 藤岡 みなみ

「性格整形」（藤原くらら）

美容整形の広告が増えている昨今、この物語の性格整形というテーマがとても時代性を感じさせ、自然に受け入れられる設定だと思いました。また、性格が良いとされる人物が仲間はずれをする場面や、自らの優越感に悔しさを覚える場面など、「性格の良い・悪いとは何か」を考えさせられる内容で、読後にさまざまな思考を巡らせる作品だと感じました。

—— KENTHE 390

「パンのパン屋さん」（関口朋也）

パンがパンを作っているというアイデアに惹かれました。登場するパンもじつにおいしそうで、読んでいてお腹が空いてきます。一番を決めるための大会の審査員にフランスパンを選んだセンスもとても好きです。ラストの「半がく」にもサービス精神があふれていて、お店に行ってみたくありませんね。とても平和で、かわいらしい一作でした。

—— 田丸 雅智

「超高齢化社会」（岩本透青）

「3Dプリンターで人間をつくると国から謝礼金がもらえる」という、風刺がきいた設定にしびれました。作られた人間は丈夫で不死身だから完璧かと思いきや、老いという概念は残されたままなのが味わい深いです。年老いたプロ野球選手が活躍している、という表現でこの不思議な世界の情景が浮かびました。

—— 藤岡 みなみ

プ 審
ロ
フ 査
ィ
ー
ル 員

審査員長 田丸雅智

ショートショート作家。二〇一一年に作家デビュー。代表作「海酒」は短編映画化されカンヌ国際映画祭などで上映された。現代ショートショートの旗手として、執筆に加え全国各地で創作講座を開催するなど幅広く活動。

審査員 K E N T H E 3 9 0

ラッパー。町田市出身。フリースタイルバトルで実績を重ね二〇〇六年にデビュー。二〇一二年から音楽レーベル「DRAM BOY」を主宰。国内外でのライブのほか、TVやラジオへの出演、楽曲提供、音楽監修など幅広く活動。

審査員 藤岡みなみ

エッセイスト・ラジオパーソナリティ・ドキュメンタリー映画プロデューサー。時間SFと縄文時代が好きで、読書や遺跡巡りって現実にあるタイムトラベルでは？と思い二〇一九年からタイムトラベル専門書店を始める。

実

施

概

要

「ことばらんどショートコンクール2024」実施概要

主 催 町田市民文学館ことばらんど・町田市立図書館

協 力 東京町田・中ロータリークラブ

応募資格 町田市在住・在学の小・中・高校生

募集期間 二〇二四年七月一日～九月二〇日

募集作品規格 ショートショート作品

四〇〇字詰め原稿用紙一～五枚

賞 市長賞

教育長賞

東京町田・中ロータリークラブ会長賞

審査員賞

ことばらんど賞

森村誠一賞

審査員 審査員長 田丸雅智

審査員 K E N T H E 3 9 0

審査員 藤岡みなみ

応募件数 一一四九編 小学生 五六一編

中学生 五四一編

高校生 四七編

イラスト制作

秋山 莉穂（女子美術大学）

有園 杏（桜美林大学）

江口 藍夏（桜美林大学）

清 美晴（女子美術大学）

高平 結栴（桜美林大学）

中村 花梨（桜美林大学）

（五十音順）

ことばらんどショートショートコンクール2024受賞作品集

発行 日 二〇二五年五月一日

編集・発行 町田市民文学館ことばらんど

〒一九四—〇〇一三

東京都町田市原町田四—一六—一七

電話 〇四二—七三九—三四二〇

刊行物番号 二五—一一